

上野の森の 波瀾万丈

第一回 美校騒動

東京芸術大学一二〇年の歴史の中で、大きな節目になった出来事。転機を呼び寄せた事件などを紹介する新連載。

吉田千鶴子



制服姿の教官たち。左より加納夏雄、高村光雲、黒川真頼、岡倉天心、橋本雅邦



草創期の東京美術学校

岡倉天心に惹かれるのは、天心という人物の魅力に
よるとともに、天心を含む明治の日本人の持つパッシ
ョン、チャレンジ精神、信念ある生き方の魅力などに
よるものだろうと思う。昨今、天心展が開かれ、新た
な評伝が出版され、いろいろな角度からの研究の成果
が生まれているが、それは一面においてこの困難な時
代に対処するためのヒントを天心ないし明治という時
代に求めようという志向の表れかもしれない。

さて、この天心が情熱を注ぎ込んで作ったのが東京
美術学校（美校）だ。本学美術学部の前身であり、明
治二十（一八八七）年、文部省直轄学校として東京音
楽学校と一緒に設置された。美校は五年制の男子校で、
絵画科（日本画）、彫刻科（木彫）、美術工芸科（金
工・漆工）があり、日本美術の独自性を維持・開発す
ることを目標に伝統派の作家が中心となって指導にあ
たった。天心は初代浜尾新に次いで明治二十三年校長

となり、同三十一年まで在任する。その間、職員にも
生徒にも古代の官服である闕腋・折烏帽子を模した制
服・制帽を着用させ、国粹主義的校風をアピールした。
洋風を旨とする男女共学の東京音楽学校と対照的であ
ったのは勿論のこと、一般の官立学校のなかでもきわ
めて異色の存在だったと言える。

天心というと、本学に残る下村観山作の「天心岡倉
先生（画稿）」や平柳田中作の「岡倉天心銅像」のよ
うな聖人的風貌ないしは老成した偉人の姿を思い浮か
べる人が多いだろうが、校長時代の天心はまだ二十九
〜三十七歳という若さであった。しかも、校長の職務
のほかには美学、日本（東洋）美術史、西洋美術史、西
洋史の講義を担当し、依頼製作事業や内外博覧会出品
物の製作を推進し、若手美術家たちの活動を支援し、
さらに隣接する帝国博物館の理事兼美術部長という要
職も兼ねて古美術保護行政とも取り組み、中国旅行ま
で成し遂げるといった風であったから、そこから生ま
れるイメージは使命感に燃え、よく勉強し、画策し、
額に汗して東奔西走する若々しい情熱家の姿だ。橋本
雅邦をはじめとして遙か年上の教授たちも、その意気
と才能に心服してよく協力し、その結果、この異色の
学校の運営は一応軌道に乗り、明治二十六年から美術
工芸、美術教育、美術史学、古美術保存の担い手たち
を世に送り出しはじめたのであった。

ところが、当時の美校（明治二十五、六年）は教員
二十五人、生徒二百十四人、経費約一万六千円という
小規模の学校であって、天心の言葉を借りれば「教員

足らず教場足らず実験材料足らず参考標本足らず美術教育に必要な実験は世上の依頼製作を以て之に充つるのみ」という状態。これでは目標達成はおぼつかない。そこで天心は政財界の協力者と提携画策して「美術学校拡張法案」を帝国議会上程し、年来の計画を一気に推し進めようとした。彼がそのために書いたのが「美術教育施設二付意見」である。わが国に置くべき美術教育機関全般についての構想を開示したものが、主眼は美校の拡張にあり、西洋画、西洋彫刻部門の増設を含む組織・予算の拡大に関する具体案が示されている。これは平凡社版『岡倉天心全集』に収録されており、また、原本（薊菫版印刷）も本学附属図書館所蔵「諸新聞切り抜き」の台紙になって奇跡的に残っている。見よと思えば見ることもできる。

「美術学校拡張法案」は明治二十八年三月に可決された。しかし可決されたのは天心の意図と異なる修正案であって、今後日本美術と西洋美術をともに奨励するという方針のもとに美校を拡張するという内容であった。この修正が時の文相西園寺公望の意向によることはほぼ間違いなく、法案可決後たちちに西洋画科設置が決まって西園寺と近い黒田清輝および久米桂一郎が指導者に選ばれ、翌二十九年には西洋画科が発足。従来の学校方針と係わりなくフランス流教育を開始した。黒田と久米はともに華族階級。長い間フランスで絵の勉強を続け、明治二十六年に帰国して洋画新派のトースとして美術界に登場した。美校における彼らは上記修正案を盾として行動し、発言権を行使したと考えられる。黒田の美校改革に関する意見書（明治美術学会編『近代画説 五所載』）を読めばわかるが、天心と黒田には妥協の余地がなく、そのため対立が起こり、それが種々の方面に波及した。天心の地位は大きく揺らいで反対派の乗じるきつかけが生まれ、遂には天心の辞職および美校騒動に至る。未曾有のこの学校騒

動の原因は天心の私行などではなく、もともとは西洋派の政治力による圧迫にあったのである。

西洋画科設置より半年後の明治三十年三月、早くも天心批判の論説が新聞に載り、引き続き各紙に批判論や暴露記事が掲載され、排斥気運が高まっていった。そうしたなかで、翌三十一年三月十七日、帝国博物館総長九鬼隆一も天心排斥の姿勢を示したため、天心は理事兼美術部長の辞表を提出（二十一日受理）。すると矢継ぎ早に天心や美校の内情に通じた者から天心を誹謗するおぞましい怪文書が各方面に配布され、西園寺文相指揮下の文部省が即刻校長更迭内定の措置をとったため、同年同月二十九日をもって天心は美校校長も辞任した。義憤を感じた橋本雅邦以下三十三名の教官は連袂辞職の覚悟で辞表を提出。世間を騒がす大騒動となったが、天心自身が慰留につとめたこともあって、結局教授の雅邦、川崎千虎、岡崎雪声、助教の六角紫水、剣持忠四郎、新納忠之介、西郷孤月、横山大観、岡部覚弥、寺崎広業、桜岡三四郎、小堀鞆音、関保之助、下村観山、囑託の後藤貞行、桜井正次、菱田春草、山田敬中らが辞職。このうち新納、西郷、横山、岡部、寺崎、桜岡ら助教教授六名は懲戒免官とい

厳しい処置（大正元年免除）を受けた。辞職組の大半は直ちに谷中で天心・雅邦を中心とする在野団体・日本美術院を立ち上げた。

夢半ばにして美校を去った天心はその後美術院の指導者、ボストン美術館のキュレーター、古社寺保存会委員としての任務を遂行しつつ思想家として世界的に活躍する。一方、美校は騒動後一時期混乱に陥ったが、明治三十四年就任の校長正木直彦によって日本美術も西洋美術も同等に尊重するという方針のもとに諸般の整備が行われ、正木の在任三十一年の間に専門学校として揺るぎないものとなった。正木は就任の年に日本美術院との和解をなすとげ、西洋派とのバランスをとりつつ天心の伝統復興路線も引き継いでゆくことにしたのであった。

（よしだ・ちづこ／学史編集担当）

次号予告

東京音楽学校存続騒動
 第 4 回帝国議会が開院した明治二十三年、衆議院予算委員会では、経費節減を理由に高等中学校、女子高等師範学校とともに、三年前に設置されたばかりの東京音楽学校の廃止が議上った。これに対して議会の内外に議論が百出し、東京音楽学校存続論争へと発展した。廃止を免れるまでの経緯、議事録の一部、新聞雑誌記事、および学校側が官立音楽学校存続の必要性をまとめた資料などを紹介する。



下村観山「天心岡倉先生（画稿）」
 （大学美術館蔵）